献 呈 の 辞

本号は、本年 3 月 31 日をもって定年を迎えられ、島根大学教育学部を退職される木村東吉先生のご退任記念号である。

木村先生は 1983（昭和 58）年 4 月の本学赴任以来、国語教育研究室に所属されて、ご専門の日本近代文学を中心に精力的な研究・教育活動を展開してこられた。この間の、ご専門に係るご業績、ご活躍の詳細に関しては、島根大学教育学部国文学会『国語教育論叢』等、他の紙面に譲ることとして、ここでは本福祉社会コースに関わるかぎりにおいて、先生のご活躍の一端を紹介させて頂くことにする。

まず以て先生は、本コースの創設に当たり先頭に立って尽力された。遡れば 1997（平成 9）年、当時の文部省による教員養成学部学生定員削減計画に端を発し、島根大学教育学部でも教員養成課程を縮小する改組が模索される過程で、すでに設置されていた生涯学習課程に次ぐ第二の新課程のなかに、社会福祉士国家試験受験資格の取得を目的とするコースが新設されることになった。改組のための特別委員会委員に選出された先生は、当初から中心的役割を担って参画され、文部省・厚生省との折衝、県下の福祉施設・機関との実習契約締結、さらには社会福祉学担当教員の人選等々、山積する難問を、同じく特別委員会委員であった槇原茂先生や当時の教育学部長であった中川政樹先生とともに、一つ一つ粘り強く解決していかれた。従来の島根大学教育学部にはまったく未知の世界であった社会福祉領域の導入という難事を、木村先生は見事成功に導かれたのである。こうして、1999（平成 11）年 4 月、教育学部生活環境福祉課程福祉社会コースが誕生するに至る。

その後、本コースは順調な歩みを続けたが、完成年度を迎えた翌年の 2004（平成 16）年 4 月から、教員養成に特化する教育学部の再改組に伴い、法文学部社会文化学科への移設を余儀なくされた。しかしコース創設時の理念・カリキュラムはほぼそのまま継承されており、また今春卒業の 3 期生に至るまで、卒業生のほとんどが公務員や施設等、福祉関連の希望職種に就職を果たしている。移設された法文学部では社会福祉学担当教員の増員も予定されており、まさに時代の要請と地域社会のニーズに合致したコースとして、いっそうの発展が期待されている。本コースのこのような盛況を見るに付けても、社会福祉領域の導入を積極的に推進された木村先生の炯眼が、今さらながらに実感される。

ところで本コースの教育・研究活動は、教育学部国語教育研究室と社会科教育研究室に所属する教員の一部が、学生指導のための「教室」組織を構成するという新しい形態において担われてきた。先生はこの「教室」運営や日常の教育・研究活動にも積極的に取り組まれ、多くの学生がその薫陶を受けている。さらに先生は、コースの教育・研究活動の拠点を築き上げるべく、本誌『福祉文化』の発刊をいち早く提唱され、その編集作業を一手に引き受けてこられた。制度や実践としての福祉の背後にある文化や人間の問題を、各教員が専門とする人文・社会諸科学の立場から広く考究していく必要性を説かれ、ご自身もご専門の日本近代文学研究の視点から福祉問題に鋭くアプローチする斬新な論考をほぼ毎号寄稿されるなど、「教室」担当教員の研究活動までも精力的に牽引してくださった。

このように木村先生は、まさに本コースの生みの親であると同時に育ての親でもあられた。先生が恙なくご退職を迎えられたことは喜ばしいかぎりではあるが、一方でわれわれ教員・学生一同にとってかけがえのない存在であり続けてこられた先生のご退職に、導き手を失う不安と一抹の淋しさを感じないわけにはいかない。願わくば今後とも、従前同様にご指導、ご助言を賜ることができれば幸いである。

木村先生が創刊され育ててこられた本誌『福祉文化』第 4 号を先生のご退任記念号として捧げさせて頂くことで、ささやかながら先生のご尽力・ご学恩に対する感謝の意を表わすとともに、あわせて先生の今後のご壮健を祈念して、献呈の辞としたい。

2005 年 3 月

福祉社会教室主任　山﨑　亮